

## 日本文明史の展開と中国文明の影響

—日・中文明史の時代区分の比較文明論的研究へのノート—

石田一良

私は昭和五十三年（一九七八）に日本文明史の時代区分に関する永年の持論を東海大学文明研究所の研究会で披露し、その梗概を同研究所の機関誌「文明」（一一号）に掲載して戴いたことがある。その時代区分の要点の概略は次の通りである。――

古来、日本人は二つの産業革命を経験してきた。第一の産業革命は南中国からの水稻農業技術の伝来であり、第二の産業革命はヨーロッパからの機械工業技術の導入であった。この二つの産業革命によつて私は日本文明史を三期に大区分する。第一期は、石製の手道具をつかつて日本の風土に働きかけ、狩猟採集という生産方法で生活をし社会を形成していた時代（その末期は縄文時代）、第二期は、金属製の道具をつかつて日本の風土に働きかけ、水稻農業という生産の方法で生活をし社会ないし国家を形成していた時代である。第三期は、近い将来に訪れるであろう機械工業時代で、人間は、道具をつかつて生産活動を営み社会・国家を形成する時代を終えて、眞の意味の機械——機械とコンピューターを連結した産業ロボット等——を生産手段とし生産過程から人間を排除して工業生産を営み新しい文明社会を創るであろう時代である。西洋では産業革命以来三〇〇年、日本では明治の産業革命以来一〇〇年、近ごろようやく人間が道具的機械と共に働いて工業生産する過渡の時代をすぎて、眞の意味での機械工業文明の時代に入らうとし、日本はいま人類史上未曾有の大転換点に立つてゐると私は考えてきた。トフラーの『第三の波』（昭和五五年一

九八〇）の邦訳が出版されてからも、私のこの持論は變っていない。

私の持論は日本文明の性質に関する私見を条件づけた。すなわち、私は今日内外人が「日本」文明の特色と称しているものは、水稻農業時代——つまり日本文明史上の水稻農業時代という特定の一時期の間再生産されつづけていた文明の特色にすぎず、日本の風土と民族の続く限り日本文明史を一貫する不变の特色ではなかろうと考えている。

さて私は水稻農業文明の時代を、始原、古代、近世の三期に時代区分する。この時代区分は、私自身の日本文明史研究のプロセスにおいて、「文化」の観点から日本歴史の全過程に光をあてたときに見出されたものであるが、この時代区分が日本人の中国文明の受け容れ方の変化の三段階を示すことも、先の小論で言及したところである。

すなわち、始原時代は水稻農業技術が南中國から、おそらく朝鮮半島の南端をかすめて伝来して以来、古墳時代を経て推古・天武の間（私のいう飛鳥時代）に至るまで、古代は飛鳥時代を過渡期として天武以後承久・建武の間（北条執権時代）に至るまで、近世は北条執権時代を過渡期としてそれ以降幕末に至るまで、それ以後の明治・大正・昭和の時代は、前述のように真の意味での機械工業時代へ日本の文明が大転換する過渡期（道具的機械工業生産の時代）と考えている。そして古代は日本人が高度の「北中國」文明（隋・唐文明）をうけ入れて、それを日本化 Japanization して「國風化」文明を創つていった時代、近世は日本人が「南中國」の文物（宋ことに南宋および元・明・清代の文物）を利用して、いわゆる「日本的な」文物を創つていった時代であった、と私は考えている。「中世」の存在を認めない理由も、私は先の小論で説明したが、このノートでは私の見出した日本文明史の時代区分を中国のそれと照合して、各時代の意味を、今一度、考えてみたいと思うのである。

(一)

## 中国史の時代区分

中国の歴史を現代史学の立場から時代区分したのは、わが国では内藤湖南博士にはじまるという。内藤博士は、支配形態や漢民族と周辺民族との関係、あるいは文化現象の観点から、後漢の中ごろまでを古代（古代帝国の時代）、三国から唐末五代までを中世または中古（貴族政治の時代）、宋以後現在までを近世（庶民階級の台頭、天子の独裁の時代）とよび、中間に二つの過渡期を設けた。（『支那上古史』『中國中古の文化』『中國近世史』）

この説を承けて宇都宮清吉氏は「発展と完結」の理論（各時代はそれぞれの時代格を形成するという理論）によつて礼教的且法術的政治性を時代格とする秦漢の時代を古代、六朝の自律性という時代格と隋唐の政治理性と自律性の融合という時代格との二つの時代格をもつ時代を中世と称して内藤説を補充した（昭和三年一九四七「東洋中世史の領域」）。

宮崎市定博士は内藤説を継承しつつ博士独自の「分裂と統一」の理論（時代が分裂の方向をもつか統一の方向をもつか）によつて、太古より漢代までを古代、三国より唐末五代までを中世、宋以後清朝の滅亡までを近世（中華民国以後を最近世）とした。（昭和二五年一九五〇『東洋的近世』、三二年『中国古代史概論』、五一年『中国史』）

こうした京都の東洋史家の説に対し、東京方面では前田直典氏が、古代を奴隸制、中世を農奴制、近世を自由労働者制の時代と考えるマルクスの経済発展段階説に従つて、唐末五代までを古代、宋以後明末までを中世、明末以降を近世に配当した（昭和二九年一九四八「東アジアの古代の終末」）。仁井田陞氏は農奴と地主の関係（「主僕の分」）に注目して唐宋時代は古代と中世の分界で、唐までは古代、宋元は中世に入ると説いて、前田説を補強している（昭和二五年一九五〇「中國社会の「封建」とフューダリズム」）。

しかしこれらの説は同じ唯物史観による中国の歴史学者（剪伯贊氏ら）には受け入れられなかつた。剪氏によると、唐代に奴隸的なものが存在していたとしても、奴隸の生産力が社会の経済関係を決定し国家の経済的基礎を形成した

のでないから、唐代は奴隸制の時代ではないと説いて、前田氏らと全くちがつた時代区分を唱えた（一九五七『中国史の時代区分』）。日中両者の主張がその後調整されたという話は聞いていない。

以上の内藤・宮崎説と前田・剪説は、ともに中国の南北文明の相異を時代的相異のうちに解消して、時代区分形成の重要なファクターと考えないところに、共通の特徴をもつようと思われる。

## 南北文化観による時代区分 一

中国の南北文化観の立場に立つて中国文明史を時代区分したのは桑原鷗藏博士であった（大正一四年一九一五「歴史上より観たる南北支那」）。

桑原博士は、シナには南北の区別がある、北シナは主として黄河、南シナは揚子江の流域地で、南北シナは淮水・漢水を以て界する、南北シナは、地勢・地味・気候・物産、その他風俗人情百般に涉つて顯著な相違をもつてゐる、と説きはじめた。しかし博士はその南北風土の相異の認識を以下の論述に貫徹させることなく、ただ中国の文運の盛衰を南北について説明してゆく。博士はいう——漢族は今の河南省あたりを中心とした北シナを根拠地として四隣の異族を戎狄・蛮夷と貶め、自らは夏または華と称した。したがつて春秋戦国時代に世に出た文武の大人物、例えば儒家の孔子・孟子、道家の老子・莊子、兵家の孫子・呉子はみな北シナの産である。要するに先秦時代に南シナと北シナとの間には大きい文野の懸隔があつた。秦漢以来、漢族の勢力範囲が拡大するとともに、漢族の南方に移住するもの多く、南方の非漢族も次第に漢族化して、南シナの風氣は漸次開発されたけれども、兩漢・三国・西晋時代を通じて文化の中核は北シナに在つた。

ところが今より約千六百年前、西暦四世紀の初になると、塞外種族が北シナを占領し、漢族の建てた晉は都を黄・渭川畔の洛陽・長安から揚子江の南岸の建康に移し、東南半壁の天地に東晉を建てた。この晉の南渡という大事変は

南北シナの文野の区別に一大変動を生ぜめる一大原因となつた。晉の南渡後三百年に亘つて塞外種族が古来漢族の根拠地で同時に文化の中核であつた北シナを占領し支配したが、当時北シナに入りこんだ塞外種族は居民の半に近く、塞外種族の支配下で漢族の文化は凋落していった。これに反して、南シナはこの間終始漢族の天子を戴き、漢族の士民も少からず南方に移住し永住して漢族特有の文化を南方に伝播し、その開発に多大の貢献をした。

こうして、北シナと南シナにおいて文芸・学術等は顯著な相違をあらわしたが、隋・唐による南北の統一によつて両文化が融合された。そのとき南は北に優越したが、これは南シナの北部に限られ、南シナの南部は一般に蛮夷の区と認められていた。晉の南渡後約八百年で宋は塞外種族の女真（金）に逐われて江南にのがれ杭州に都した。

宋の南渡とともに、北シナの名族が多く帝室に従つて江南に移住し、南方の開発に大影響を与えた。南宋時代における福建地方の開発は眞に刮目に価し、福建はいわゆる宋学の中心となつた。南宋以後のシナの文運の大勢を遡観するに、北シナの文運は到底南シナに及ばない。科舉を見ても南方の人材は北方に比べて七倍以上、博学鴻詞科においても南シナの人材ははるかに北シナに優越して、その数の懸隔はおどろくほどであった。

シナの歴史は一面から觀ると、夷狄の北シナ侵入による優秀な漢族とその文化の南進の歴史である。魏晉以前（南北朝以前）ではシナ文化の中核は北シナに在り、南宋以後は南シナに移つた。東晉（晉の南渡）以後北宋末期に至る八百年間はシナ文化の中核が北より南に移動する過渡期であった。文運ばかりでなく、戸口・物力からみても南北シナの消長はほぼ同様であった。——と桑原博士は述べている。要するに桑原博士の南北の文運による時代区分は、この論文に関する限り、上掲の内藤—宮崎説におおよそ一致する。この桑原博士の説に対し、陳序經氏は、中国学者の旧説で桑原氏の特見ではない、その解釈はただ中国の文化の歴史と地理上の趨向の途径を明らかにしたにすぎず、南北文化の性質の不同を説明したものではない、と批評している（一九七六『中國南北文化觀』）。

陳氏のいわゆる南北文明の性質の不同によつて中国文明史の展開と時代区分を説いたものに、早く清末に梁啓超氏がいる。梁氏は「河を渡つて南すれば、天色異り、地氣異り、民情異る。蓋し南北の差殊、稍々識有る者は、皆な能く見及す」という中國人の共通体験をふまえて、二十世紀の冒頭に次々と関係論文を発表した。

梁氏は「中国地理大勢論」(一九〇一)の中で「文明の発生は河流より要なるはなし」とい、およそ河流の南北に向うものは寒・温・熱の三帶の地を一貫し、種々の気候・物産・人情を互に相い調和し利害衝突に至らしめないが、東西に向うものはこれに反する。経るところの土地は同一の気候・物産・人情をもつから、この河流とかの河流との間に往々風氣を異にする。アメリカでは東西の異同はあるが、河流はみな北より南に流れて常に南北を均調する。ところが中国ではみな西より東に流れているので、南北が趣を殊にし、統一の中にも衝突し、精神も悉くは一統することが出来ない。——と説いてゐる。梁氏は中国文明の発生と南北文明の差異の原因を風土（地理と気候）に求めて、「中国古代思潮」(一九〇一)「論中国學術變遷之大勢」の中で次のようにいう。

「凡そ人群第一期の進化は必ず河流に依りて起る。これ万国の同じくする所なり。わが中国には黄河・揚子江の両大流あり。その位置・性質各々殊なる。故に各自その本来の文明を有し、独立發達の觀をなす。しばしば相調し混合すと雖も、而もその差別相は自ら掩うべからざるものあり。凡百みな然り。而して学術思想はその一端なり。北地は苦寒饑瘠にして生を謀ること易からず。その民族は精神を銷磨して日々に力め、以て衣食に奔走して社会を維持するも猶お給せざるを恐れ、玄妙の哲理に馳騁するに余裕なし。故にその学術思想は常に實際に務め、人事に切に、力行を貴び、経験を重んず。而して修身齊家・治國利群の道術、最も發達せり。ただ然るが故に、家族を重んじ族長制度を以て政治の本と為す。老年を敬い、先祖を尊び、随つて崇古の念重く、保守の情深く、排外の力強し。則ち古昔先王

はその国を内にし夷狄を外にし、礼文を重んじ親法を繋ぎ、法律を守り天命を畏る。これ北学の精神なり。南地は則ちこれに反す。その気候は和く、その土地は饑にしてその生を謀ること易し。その民族必ずしもただ一身一家の飽煩のみをこれ憂えず。故に常に世界以外を観じ、初めにして世を軽んじ、既にして世を遊び、既にして世を厭う。実際に屑屑せず、故に礼法を重んぜず。経験に拘拘せず、故に先王を崇めず。またその発達はやや遅し。中原の人、常にこれを鄙夷して謂いて野蛮と為す。故にその北方の学派に對して吐棄の意あり、破壊の心あり。玄理を探り世界に出で、物我を育うし階級を平にし、私愛を軽んじ繁文を厭い、自然を明らかにし本性に順う。これ南学の精神なり」と説いている。梁氏は、さらに仏教にも地理の不同によつて南北の差別がある、隋唐の際には宗風きわめて盛んで、天台・法相・華嚴三宗はみな北に起り、義を陳べること閑深、法を説くこと博弁、修証の法は一に実践を務め、疏釈の書はややもすれば汗牛となる。ただ禪宗のみはひとり南に起り、教外別伝と称して専ら悟証によつて文字によらないと説き、文学・美術・音楽も南北地理の不同から同様の相違が生れる、といふ。「これに由りてこれを觀れば、大にしては経済・心性・倫理の精、小にしては金石・刻画・游戯の末も、一も地理と密接の関係あらざることなきにちかし。天然の力量の人事に影響するもの、また偉ならずや、亦た偉ならずや」という。

さらに梁氏は「中国地理大勢論」でこれらの哲理・経学・詞草・筆法・彫刻・図画・音楽などを文学のうちに含めて、「文学地理」の差別は常に「政治地理」上の差別に随つて転移すといふ、政治上の南北の不同を特に重視する。そして政治上、北方は常に南方より優勢を占め、歴代皇帝の都城も北方に位置するものが断然多い、黄河流域の国都は三皇に始まり清代に至り、揚子江流域の国都は三国の吳に始まつて明代に至るが、その間北方宅都の時代に南方に都なきこと一千余年、南方宅都の時代に北方に都なきはただ明の太祖のときの二十五年のみ、と論じてゐる。

梁氏はこうした南北文明の相異を説いた後、「中国地理大勢論」の中で、中国文明史の時代区分を説いて、周より以前は黄河流域が全国の代表であつた、漢より以後は黄河と揚子江の両流域が全国の代表となり、近くこの百年来は黄

河・揚子江・西江の三流域が全国の代表となった、中国歴史の大部分は黄河・揚子江が両民族競争の舞台であった、という。梁氏はまた、三代以前は河北が極盛、秦漢の間は文明が河北より江南に移り、六朝以後は江南が驟々然として興った、漢以降の中国の歴史の大部分はみな黄河・揚子江の間の原野で演ぜられた、という。氏はまた、唐より以前は江南の諸省は大局に軽重なく、宋より以後は大事はみな日々この間に出了、と説いている。そして前史を歴覧すると、大抵北人は南伐をして志を得たが、北伐して天下を統一したのは明からはじまると説いて、地理と歴史の進化の関係に思いを致すべきだ、という。

これらの文章を総合すると、梁氏は、周以前を始源時代、秦漢三国のころを古代、六朝隋唐を中心、宋以後を近世として特に明以後に注目し、古代・中世をくくって近世に対置し、この百年を近代と考えていたようである。梁氏は中國文明の時代区分を地理と歴史の関係という観点から把えて、京都の東洋史家たちと同様の見解を、彼らに先立て二十世紀の冒頭に早々と唱えていたことになる。

しかし梁氏の説においては、風土の相異は短絡的に文明の相異に關係づけられていて、人間の自然への働きかけの方を両者の間に介在させる配慮を欠いていたといえる。

### 南北文化観による時代区分 三

もとより風土と人間とは別個の存在である。しかし風土は人間の労働の形式、生産の方法を制約する。人間はいかに努力しても砂漠で漁撈は出来ない、水稻農業も無理であろう。しかし、風土が人間の生産方法を一方的に決定するとは限らない。例えば、中国人は石器時代には狩猟採集という方法で中国の自然に働きかけたが、殷周以降は同じ風土に農耕という方法で働きかけ、ともに風土の影響力を社会的生産力にかえている。しかし、そのさい農耕の種類を風土が制約することがある。同じ農耕でも北中国では畑作農耕、南中国では水稻農耕が行なわれたのがその例

である。日本でも狩猟採集生活の後に焼畑農耕が行なわれたという説があるが（佐々木高明『稲作以前』）、水稻耕業とう生産方法が南中国から伝わると、比較的短期間に西日本一帯に、間もなく東北地方にも布及していくと考えられている。（地下資源を原料とする機械工業生産では、風土の影響は必ずしも必要でなく、時には障害とさえなる。）

次に紹介する松田寿男博士の中國史の時代区分は、上述の先駆の成果を吸収しながら、その欠を補うところがある（昭和四六年一九七一『アジアの歴史——東西交渉からみた前近代の世界像』）。

松田博士はいう——黄河の流域は黄土の分布を特徴とする。この地域の気候は乾燥ぎみで酷寒と酷暑をくりかえす。降雨がすくないので水脈の発達も貧弱であるから、渭水盆地のように歴代の首都が置かれた部分で、わずかに河水が灌漑に利用されていたほかは、だいたい地下水に頼らなければ農耕生活ができなかつた。古代中国史を特色づけていいる「井田」は井戸水（地下水）灌漑によって乾燥した黄土の原野に営まれる小面積の耕地を意味していた。この黄土台地を流れる黄河は河南（洛陽）の東方で急激に低地へと溢れ出す。この低地では古代では年代を遡るほど沼沢地や湿地帯の面積が広く、河道もしばしば変遷し洪水をくりかえした。そのような氾濫原で農業生活を営むには地理学でいう輪中に頼る外はない。古代の漢人はこのような孤島的小耕地を「邑」といった。最古の中国（もちろん華北に限られる）は呂制国家からスタートし、時代を経るにつれて小国の中に連合なしし支配の関係を生じ、ついに殷・周の統一国家が出現した。戦国時代に七雄に分れていた中国は渭水盆地から起つた秦によってはじめて一帝国にまとめられ、ついで漢が統一の業を大成した。黄土地帯の酷しい自然条件のもとに生育した文化を端的に表示したのは、現実的な思惟と保守主義、そして政治道徳論に終始した儒学（孔孟学派）であった。儒学は漢の政治力が極盛に達したと見られている武帝のときに国学・国教の地位を占め、以後、清の時代に至るまで支配層の精神的支柱となつた。黄土文化は漢帝のもとで、完成した姿を見せたのである。

漢帝国の末期から中国には分裂の傾向が強まり、南北朝時代は政権が対立するだけでなく、華北と華南の異質の風

土の上に異質の社会・文化を発達させた。秦嶺＝淮河線を夾む自然条件の相異は住民の生業をも支配して、北 Dry China は畑作農耕を立て前とし、南 Wet China は水稻農耕を主とした。「麦のシナ」と「米のシナ」がこの一線で分別されて、華北と華南に社会発展の差異、社会姿相の相異を生じ、南人と北人の考え方を異にしたのである。中国（シナ）が政治的に分裂する場合には必ず秦嶺＝淮河線が基本とされた。南北のちがいはただ地理的だけではなくて、歴史的でもあったのである。

さて揚子江流域が漢人の発展のために開かれ、それにふさわしい動きを見せはじめたのは吳および蜀の建国による。ついで西晉の時代に大量の流民が江南（揚子江デルタ地帯）へ流入して華北の進んだ農耕技術を水稻農耕に応用した。江南の水稻農業は著るしく高まり、揚子江のデルタ地帯は中国の穀倉と化していった。一方、北方では異民族の魏が華北を統合したが、首都を華北の中央の洛陽に移し、積極的に漢化につとめたので、秦漢以来の華北文明の伝統は強く守り続けられた。洛陽遷都直前に発布された均田法は、漢以来の土地政策を積極化してそれを法文化し制度化したものと認められる。

異民族が華北に樹立した北朝においては、別段新しい政治が行なわれたわけではなく、社会は漢代以来の畑作による自然経済の段階を越えなかつた。政治や社会教化の基本として形骸化した儒教が守られた。これに反して、江南の東晉以下歴代の漢人政権の南朝は北方とちがつた社会の進展をみせた。江南の生産力の向上は水稻田の拡大と充実を齎らし、余剰生産物の商品化、および農耕からはみ出した人口の他産業への転換などによって物流が飛躍的に高まり、江南は商業経済の段階へとふみ入つたのである。

この南北を一体化した隋は大運河をつくつて黄河・揚子江を結んだ。隋の創始した「科挙」の制も試験によって全國平等に官吏を採用しようとする南北統一策の一端であった。試験の基本的テキストの五經の註訳書として唐の太宗の勅命によって『五經正義』が選述されたが、南方の新解釈と北方の伝統的解釈が半半した。しかし、中国の南北を

統括した隋と唐とは、立國の基盤をあくまで華北に置き、政治制度や社会の組織づけでは北朝のそれを継承し、漢帝国以来の伝統を重んじた。政治は依然として地主貴族とのナレフイであり、かつ政府を運転する財政面では、北朝以来の均田法が採用された。（唐の国家は均田法的体制によっていたといえる。）要するに、唐は北朝の諸制度の大成者であり、漢以来の伝統社会の上に立ち、思想や文化の面では南朝系の参加を許したのである。

ところが、安禄山の乱以後には均田法が廃止されて兩税法が発布せられ、南朝を特色づけていた大土地私有の公認（莊園制に発展してゆく）や貨幣経済の発展（都市経済が中心となってゆく）が社会の表面にあらわれ、同時に江南的思惟が優勢となって、近世への道が開かれていった。唐朝が亡び五代十国の紛乱期から宋にかけて、首都が長安から中国の南北を結ぶ大運河の北の人口の汴（開封）に進んだが、北方に異民族が攻め入り秦嶺＝淮河線以北の地方を宋から奪つたので、宋は江南の杭州に移つて中国の南半を統治し、世は再び南北朝の世となつた。この情勢は、漢人勢力の後退のように見えるが、漢人がとかく飢饉地帯と化しやすい黄河の流域（生産性の低い畑作地帯）を放棄して江南の穀倉地帯（生産性の高い水田稲作地帯）に施政の中心を移し、専らその力を資源の開発に注ぐに至つたことを物語つてゐる。こうして商業は飛躍的に高まつて、経済的な繁栄をもたらし、イスラーム教徒と船舶貿易が行われるまでになつた。一方、教学の方面でも、漢帝国の国教であった儒学は唐のころもなおその位置を譲らず、思想的な発展を忘れて固定化していたが、今や、南方禪の影響をうけて性理学という新しい儒学となつて、在來の五經より四書を重んずるようになった。この新儒学の代表は四書集註を著わした朱子であった——と松田氏は説いている。

松田氏によれば、唐代まで中国人は北方で畑作という方法で黄土地帯の自然に働きかけて、その影響力を社会的生産力にかえて文明をつくっていた、宋代よりは南方で水田稲作という方法で湿润地帯の自然に働きかけ、その影響力を社会的生産力にかえて、北方どちがつた文明を发展させた、ということになる。松田氏は隋・唐を古代より近世への過渡期（中世）としつつ、古代・中世を大きく括つて近世に対置したといえよう。要するに風土に働きかけ、

る、生産方法の相違に注目した松田氏の時代区分は、京都学派のそれと一致したのである。但し松田氏のすぐれた研究も風土の文明に与えた影響を説くところは梁氏の見解に類し、風土と文明の内的関係を照明するに至らなかつたのは望蜀の感を生ぜしめる。

## （一）

日本両国学者の説をオムニバス的に陳列している間に髣髴してきた中国史の時代区分を冒頭に述べた日本文明史の時代区分に照合すると、日本文明と文明史の意味を理解する助けになることが多い。私見の一端を簡単に申し述べることにする。――

さて我が國の始原時代において四世紀以降に各地に前方後円墳がつくられた。とりわけ大和朝廷は巨大な墳丘を造るとともに、畿内、ことに大阪湾沿岸を中心に大水利（灌漑・治水・開墾）事業を起した。このことは日本の水稻農業が盛大となつて、強大な豪族が各地に発生し、ことに中央大和朝廷の威富が圧倒的に高まつたことを物語つてゐる。

中国北方の黃河流域において巨大な水利事業が行なわれたとき、強力な中央集権的官僚機構とその上に立つ専制権力が生れたが、両者の間には必然的関係があると、ウイットフォーゲルは説いている（邦訳『東洋社会の理論』）。日本最初のこの大土木事業は一見、そのミニチュアを提供する觀がある。前方後円という墳型は中国に例を見ないが、左右全くシンメトリーな巨大な建造物の築造には、北中国古代文明の遠い影響が想像される。『日本書紀』がこのころ百濟を経由して北方中国文明の中核をなす漢魏系の儒教の政治理想が大和朝廷に採用されたと伝えてゐることも考え合わされる。しかし、漢代文明を特徴づけた讖緯思想にもとづく銘文を鏽つた鏡を納めながら、その古墳が讖緯説の教え通りに南面せず、隣接する古墳も各自ちがつた方向を向いてゐること、その影響の程度が察せられる。つまり、

畑作よりはるかに生産性の高い水稻農業を中国よりはるかに早く全国的な社会的基盤として原始封建体制を完成し、独自の水稻農業文明を創りはじめていた日本は、全く異質の北中国の風土に生れた秦漢文明は取り入れ難かったのであろう。秦漢文明をうけ入れなかつたことがその後の日本文明史の進展を中国のそれから大きくわかつ所以になつたようと思われる。

さて中国では漢王朝のあとに三国が起り、魏が北方、蜀・吳が南方に成立したが、その南北王朝を合わせて、漢文明を継承しながら南方文明を取り入れて隋・唐の大帝国が出現したのは、日本が原始封建体制の時代を終えて統一国家の体制を整えようとしていた飛鳥時代のことであつた。日本は待ちかねて、いたように、隋、ついで唐に、矢つぎ早やに、しかも大量に、留学生を送りつづけて、その文物・制度を将来した。この突然の、おどろくべき変化は、隋・唐文明における、南方水稻農業文明による秦漢文明の伝統の南方化、大和朝廷による全国的統一への機運の増進によるようと思われる。

それでもなお、日本は旧来の文明を捨てて新しい中国文明をうけ入れたのではなかつた。すなわち、日本の風土における水稻農業が生み出した氏族共同体を政治的単位とする従来の氏制国家の社会的基盤を温存して、その上に中国北方古代の統一政治の伝統を継ぐ律令政治の体制を積み重ね、日本の古代統一国家の完成をはかつたのである。つまり、漢以来の北方中国文明の伝統（但し唐によって弱められた）とこれと全く異質の日本古来の文明の伝統を上下に重ねた二重構造の国家を形成し、上下両層が相互に矛盾しつつ助け合ひ構造連関を構築したのである。一方、中国の唐朝では、北方漢文明の伝統の枠のもとで南方の文明をとり入れたが、その文明の北方的要素は北中国の風土産業に支えられ、南方的要素は南中国の風土産業にその根を下ろしていた。この、新旧文明の矛盾的協同関係は、日本では政治体制と社会機構の間に形成せられたのに對し、中国では言わば南北の地理的空間的関係において形成せられた觀がある。この相異に、両国文明の命運がかかつていていたと考えられる。

つまり、中国では、水稻農業の進展に伴なって文明の南方的要素が、畑作にもとづく北方文明の伝統を切り崩して、本質的には北方古代の政治的伝統をついだ唐王朝を崩壊させていったものと考えられる。一方、日本では上述の国家の二重構造の下部は水稻農業に深々と根を下ろし、不斷に養分を吸收しつづけていたので、時がたつにつれて下部構造の充実が上部構造を次第に切り崩し、律令体制を崩壊させて、氏族国家の体制の伝統を新しいかたちで復活させていったのである。その間、日本文明の上部構造は、いわばパイプラインで中国本土の北方的伝統文明につながっていったが、平安時代になると、唐朝末期の乱れを見て日本は遣唐使の派遣を停止して自らそのパイプラインを切断し、文明の日本化を一段と促進したのである。宮崎市定博士が古代日本における均田法の採用等について、中国では中世、日本では古代という風にワンラウンドの差があったので、借り物の悲しさ、法は造る傍から崩れ去り、帰化権を獲得することが出来なかつた、と説明しておられるのは如何なものであろうか。

さて中国では宋が建国したころ、文物・制度は一層南方化した。そのころ日本でも令外の官が切りに置れ摂関政治がはじまって、政治の國風化（水稻農業文明化）が一段と進んだのである。そして宋が北中国から逐われて南に移り、国家・社会が水稻農業生産の上に築かれるようになつたころ、日本では水稻農業生活から生み出された武士が貴族社会に浸出してきて、保元・平治の乱を経、はじめは平氏、続いて源氏の朝廷への接近を通じて、公卿の政治権力を蚕食しはじめた。南宋が元に攻められて衰えてゆくころ、承久の変が起つて武士は公家と政治的に対等となり、元寇を契機として優位に立つよくなつた。中国で南宋の時代に民族主義が興つたように、日本でも鎌倉時代になると公卿の間にも民族主義的自覚が生じ、平安初期には顏付の中国人に似るのを喜んだ公卿も、漢学に対しても儒学を主張するようになつた。ことに水稻農民出身の武士は古代国家の律令から全く離れて、「その時々の彼らの共同体の生活の意志」（「道理」）によって彼ら自らの法律（「貞永式目」）を作るにいたつた。宋朝が滅亡したのは日本の文明史を古代と近世に大きく分ける承久・建武の峰の頂であったが、やがて日本では室町幕府、ついで中国では明王朝が成立し

て、中国も日本も、いよいよ「近世」らしい国家（商業の発達を含む水稻農業国家）の体制を整えていったのである。室町時代に入ると、古来日本の水稻農業生活が再生産しつづけてきた文明創造力は、間接には長年にわたる中国文明の刺激をうけ、また直接には水稻農業の発達によって力をつよめ、南中国の水稻農業生活の生んだ文物（禪や朱子学など）を利用して、いわゆる「日本らしい」文物を創るようになつていった。但し、中国が近世になつても政治の中心である国都を依然として北中国に置いて、古代北方文明（秦漢文明）の伝統を繼承して南方文明の外榦としていたのちがつて、日本は政治の中心を古代文明（ひいては古代中国文明）の余光を残す京都から離れて江戸に遷し、日本の水稻農業文明の最盛期を将来したのである。政治的首都の所在地とその都市景観の相異は、両国文明の近世化の程度と性質を端的に示すものといつてよからうと思う。

考えれば、日本は水稻農業の北限にある。それだけに日本人は水稻農業技術を鍛錬し労働力を集約して日本の風土に働きかける必要があった。したがつて風土と水稻農業生活の特色が濃縮されてその生活文明を濃厚に色づけることになったと思われる。日本の水稻農業生活が水稻農業時代を通してたえず再生産しつづけた文明創造の原理は、

(+) 生活中心主義 Life-Centredness (D・ブラウン博士の造語を借用する)

(+) 共同体主義 Community-ism

(+) 関数主義 Function-ism (私の造語である)

という次元を異にする三要素の構造体であった。すなわち、生活中心主義的な生活共同体の存立と繁栄を関数的に——時・空の状況に応じて——実現しようとすることが水稻農業文明創造の原理の意図するところであった。したがつて、日本人は共同体の、その時々の生活意志に真・善・美・聖の基準を求めた。これは中国において古代北方に栄え、近世においては南方文明の枠となつた理想主義・世界主義・典型主義とは相反する文化意志であった。このことは先

掲の「文明」誌（一一一号）掲載の小論で述べたところである。またこうした性質をもつ日本の文物の『特殊な国際性』について、『文芸研究』誌（一〇一集）所載の拙論「日本文化の国際性」の御参看をお願いしたい。

まことに中国は広大な国土をもつ。その広大な全領土を統一し統治するためには、南方水稻農業の生産力に国家社会の基礎を置く近世になつても、北方の広漠たる乾燥大平原を統一した、畑作農業の生産力に基礎を置く、秦漢大帝国の「政治体制とイデオロギー」の伝統を継承して中央集権的な統一国家を次々に形成してゆくことが必要であったのであらう。

それに対しても、わが国では、山川・湖海によつて蜂の巣のように小さく区域せられた土地（日本の古語でシマ・クニといふ）に働きかけの水稻農業生活から、たえず共同体生活が再生産せられ、封建的な社会の秩序、国家の体制とそのイデオロギーが形成せられたのである。始原時代の原始封建（氏制国家）体制が、北中国の古代統一国家の体制を継承した唐の律令制という中央集権の体制を通過して、近世徳川封建体制（幕藩体制）という中央集権的封建体制となつて完成したともいえるほど、封建的な生活の様態が、日本の水稻農業時代の全过程をカバーしているのである。わが国が徳川文明を日本文明の帰結とすることは、中国が秦漢文明を中国文明の典拠とするのとは、全く対照的である。

さて、日本の奈良時代、中国の唐朝以後、中国文明史と日本文明史は、思いの外、同時代性を保つて展開しているが、ここに注意すべきことは、日本が水稻農業生産を国家ないし社会の基礎として文明を創造してゆく体制を作ったのは、不思議に思えるかも知れないが、中国の南宋時代（十二世紀ごろ）をはるかに遡る古墳時代（六世紀ごろ）であつたことである。もとより中国文明なしに、日本文明の今日はありえなかつたけれども、しかし中国において秦漢文明の枠が近代に至るまではずされなかつたことが、文明にフレキシビリティを欠いて、文明の近代化において日本におくれを取つた所以ではなかろうかと思われる。中国の近代化が中国南部（水稻農業地帯）から起つた事実が思い

合わされる（陳序経『中國南北文化觀』）。

風土と水稻農業という生産方法の日・中文明に対する関係は、従来、日・中文明史の比較研究において看過ないしは軽視されてきた重要な観点であったと考えられる。

この研究ノートの作成に当つて曾我部静雄博士・西村元照学士から参考文献の蒐集その他についてお世話を辱うした。謝意を申し述べたいと思う。